

私と日赤病院

「命」守られて

荒田 悠 会員

「このままですと、眼球が飛び出してしましますよ」と。
上湧別厚生病院の医師に言われた母は、びつくりしあわてて私を北見日赤に入院させた。「蓄膿症」の手術を受け二ヶ月間入院する。
昭和三十七年五月、十七歳の時のことである。こうして、私は北見日赤との出会いによって幾度か「命」を助けられることになった。

昭和四十二年四月「切迫流産」のために私は留辺蘂町瑞穂から緊急入院する。
「赤ちゃんを助けて下さい」と、泣きながら必死に先生におねがいをした。
「頑張ってみましょう」と。
その日から、医師、看護師、助産師たちのチームワークに励まされ、私はベッドの上で寝たきりの絶対安静の生活がはじまった。

昭和四十二年四月「急性虫垂炎」にて緊急入院手術を受けた。手遅れ状態であり破裂寸前であったという。管を三本も入れられて、一ヶ月もの入院であった。
平成十三年三月「白血球減少」にて緊急入院する。この時、私の脳の中では一瞬にしていろいろなことを考えた。余命何ヶ月？……。死も覚悟しなくちゃあ……。家のこと……。
ところが、検査の結果は意外な事が判明。「今まで飲んでいた薬の副作用です。百万人に一人合わない人がいる。その方があなたなのです」という事であった。それから、私の病気に合った薬を探



すことになる。大変であったが医師は遂に、私の体に合った薬を見つけてくれた。
白血球の数値が正常になるまで一ヶ月の入院が必要であった。
特異体質（アレルギー体質）とうまくつきあって行く事は大変なことであると思ふ。
眼科・皮膚科・整形と次つぎと北見日赤に通院している今日この頃……。
今日まで「命」を守って下さったスタッフの方々に心から感謝申し上げます。

日赤小史

誘致運動 ついに落成開院

昭和9年、野付牛町（現北見市）の茶谷幸一町長を先頭に日赤の直営病院を誘致する運動が始まっていた。その時の陳情書に述べられた趣意の概容です。
『野付牛町は、交通網も整備が進み北見平野における交通文化の中核として順調に発展しているが、他都市と比べ医療施設の整備が遅れており、野付牛町はもちろん北見地方の住民は速やかな「官公立病院」の設立を望んでいる。近代都市に必要な医療施設に恵まれていない北見地方の住民は、旭川市・釧路市・札幌市の病院で医療を受けるには費用が莫大であり、社会公共医療施設がないことで必要な医療が受けられずに亡くなる現実がある。北海道民の保健衛生を目的とする、日赤直営赤十字病院の整備計画

においては、野付牛町へ設置することが、国民の保健上と将来の赤十字社にとって最も良い選択と信じて疑わな。病院設置において、他都市と比べ空気が清浄で環境のよい地域であり、幾多の好条件を整えているので、速やかに病院設置の実現を切望する。以上』
この陳情書を基に函館市等他都市との激しい陳情合戦を続けた。
昭和10年、野付牛町（人口3万1千人）に大日本赤十字社北海道支部野付牛療院（現北見日赤）の設置が決定した。新築工事は札幌市の鈴木与平衡が72,700円で落札し、昭和10年6月13日、現敷地内（野付牛町役場の東側）で地鎮祭を行った。
昭和10年11月10日、院長は医学博士三宅演で、ほかに6名の医師と多くの専門スタッフで落成開院したのである。
当時の野付牛町民の地域医療に対する見識

の高さと情熱に深く感銘し、感謝で心は一杯です。
今、先人が築いたまの財産を次の世代へ引き継ぐ責任が私達にあります。
地域医療・まちづくりという大きな視野で日赤改築問題に取り組むことが私達の使命と決意も新たに支援活動を進めて行きます。
陳情書の概容は先日行われた懇談会で吉田院長が説明に用いた資料より抜粋しました。
編集後記
最近「ここまできた北見のがん治療」「糖尿病とのつきあい方」を学ぶ機会を得ました。自分自身や身内にいろいろな病気の者がいても知職がなくて重症になる場合がある。いやありました。
日進月歩している医療、治療法を知る事、その病を我が身に置き換えて学ぶことが大切だと気付きました。
(阿久津記)